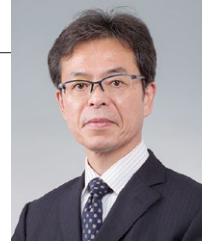


■■■ AI・ロボット人材不足は「量」の問題ではない

副研究科長 橋本 浩一



2026年1月27日付の朝日新聞は、経済産業省の2040年推計として「AI・ロボット人材が約340万人不足する」と報じた。推計では、2040年の就業者数を約6300万人とし、そのうちAIやロボットを活用する人材は約782万人(全体の12%)が必要とされる。しかし十分な対策を講じなければ供給は約443万人にとどまり、339万人が不足する。一方、事務職は約1476万人と見込まれ、その約3割が余剰になるという。経産省はこれを「理工系人材が圧倒的に不足し、今後の成長に向けて死活的な課題」と位置づけている。

ただし注意すべきは、元資料が示しているのは「AIやロボットを業務で利活用できる人材」の不足であり、必ずしも高度な研究開発人材の不足を直接意味しているわけではない点である。この構図は、かつて「2030年に最大79万人のIT人材が不足する」とされたデジタル人材不足の議論と本質的に重なっている。人材不足が繰り返されながら、その定義や育成の在り方が十分に整理されてこなかった点は、今回も同様である。

さらに、人口動態を踏まえると問題はより構造的である。18歳人口は1966年の249万人をピークに減少を続け、1992年には205万人、2014年には118万人、2026年には109万人まで落ち込んだ。労働市場への影響は数十年にわたる累積効果として現れるため、2040年に就業者数6300万人規模を維持できるという前提自体、楽観的である可能性が高い。労働供給全体が縮小する中で、特定分野の人材だけを量的に拡大する戦略には明確な限界がある。

高等教育の状況もこの制約を裏付ける。大学院在学者数は1991年の9.8万人から2012年には27.2万人まで増加したが、その後は微減し、2026年には約26万人と見込まれている。博士課程学生数は約7.4万人で長年ほぼ横ばいであり、研究開発や高度技術の中核を担う若手博士人材の層は厚くなっていない。

さらに重要なのは、AI・ロボット人材の「質」の問題である。AIやロボットは技術として存在するだけでは価値を生まない。社会実装の過程では、制度設計、倫理・法制度、社会受容、組織運用といった課題が必ず顕在化する。現場で求められているのは「AIを作れる人材」だけではなく、「AIを理解し、適切に使いこなし、社会に組み込める人材」である。

この観点から見ると、AI・ロボット人材不足とは単なる理工系人材の不足ではなく、理工系と文系・社会科学系を分断してきた教育構造そのものが生み出している問題である。情報科学を共通言語とし、工学と社会科学を横断する人材育成を進めなければ、量的不足と質的ミスマッチは解消されない。

したがって対応策は、理工系定員の拡大や一部先端分野への重点投資にとどまらない。既存人材の高度化、学部から大学院への連続的育成、博士人材の処遇改善、そして分野横断型の教育研究基盤の強化が不可欠である。経産省が指摘する「死活的な課題」とは、人手不足そのものではなく、日本の産業構造と高等教育の設計思想が転換点にあることを意味している。人口減少社会において持続的成長を実現するためには、量的拡大から質的転換へと舵を切る必要がある。

- [1] 文部科学省 産業人材育成政策について
https://www.mext.go.jp/content/20260130-mxt_daigakuc01-000046995_13.pdf
- [2] 内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局 科学技術イノベーション人材の育成・流動化
<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kihon5/1kai/siryoy6-2-7.pdf>
- [3] 文部科学省 中央教育審議会大学分科会大学院部会参考資料
https://www.mext.go.jp/content/20240711-koutou02-000037014_7.pdf
(いずれも2026年2月3日アクセス)

■■■ 研究科ニュース

●主催・共催・後援行事

- 2026.3.23 第41回統計科学セミナー(2026年3月23日開催)「密度関数の連続性に対する有限標本検定」
- 2026.3.21-22 日本社会関係学会第6回研究大会「復興のこれまでとこれから—ウェルビーイングと未来社会のデザイン」
- 2026.3.20-21 Algebraic Combinatorics Mini-Workshop
「情報学 for all by all」国立大学法人8大学 情報系大学院が共同開催
- 2026.3.15 計測自動制御学会東北支部 第357回研究集会
- 2026.3.9 第40回統計科学セミナー(2026年3月9日開催)「臨床試験におけるレスポンス解析: 成功確率の信頼区間の改良と情報損失の定量化」
- 2026.3.6 第25回(2025年度)情報科学研究科「学術懇話会」
- 2026.2.9 第39回統計科学セミナー(2026年2月9日開催)「臨床検査値相互換算式のノンパラメトリック推定法」
- 2026.2.2 第25回UDACセミナー「デジタルカーがつくるSUBARUの未来」
- 2026.1.26 第38回統計科学セミナー(2026年1月26日開催)「スパースモデリングに基づく水処理微生物群集の解析」
- 2026.1.19 第37回統計科学セミナー(2026年1月19日開催)「Exchange Rate Shocks as a Natural Experiment: Identifying Short-Run Labor Market Effects Using Difference-in-Differences」
- 2026.1.5 第36回統計科学セミナー(2026年1月5日開催)「When Does Log-Linearization Work? A Specification Test with Applications to Trade, Health, and Firm Investment」
- 2025.12.19 第35回統計科学セミナー(2025年12月19日開催)「表形式データの生成モデルとマーケティングへの応用」
- 2025.12.12 特別講義「実践的量子ソリューション創出論」協力企業向け説明会
- 2025.12.8 第34回統計科学セミナー(2025年12月8日開催)「大規模ID-POSデータのための製品埋め込みモデル」
- 2025.10.18-19 JPHACKS2025東北地区大会

●教員の受賞

- 2026.1.1 第75回 河北文化賞
(田所 諭 特任教授 タフ・サイバーフィジカルAI研究センター)
- 2025.12.11 計測自動制御学会システムインテグレーション部門にて部門貢献表彰
(大野 和則教授 タフ・サイバーフィジカルAI研究センターセンター長)
- 2025.11.22 ARNOVA Emerging Scholar Award
(Margaret Dansu特任助教)
- 2025.11.6 2026 PCP Top Cited Regular Paper Awardを受賞
(大木 武教授)
- 2025.10.7 CEATEC AWARD 2025 ネクストジェネレーション部門賞
TouchStar(代表: 昆陽 雅司教授)

●学生の受賞

- 2025.12.12 第34回博士後期課程学生発表会にてベストプレゼンテーション賞を受賞
清水 翔也(昆陽研D2)、久保田 采佳(山田研D2)、岡 佑依(齊藤研D2)、葉 夢宇(鈴木研D2)、平間 草太(大関・OU・杉山・笹尾・本多研D2)、牧本 久樹(岡谷研D3)
- 2025.12.10 第26回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2025)にて大野研の学生、横田将輝さん(D3)、鈴木裕太さん(M2)が「部門若手奨励賞」を受賞、安田運稀さん(M1)が第二十一回競基弘賞2025年レスキュー工学奨励賞の最終候補
- 2025.12.7 「NeurIPS 2025 Competition MMU-RAG」Text-to-Text Track/Open-Source部門優勝
池田航(M1)
- 2025.12.5 第33回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS 2025)にて対話発表賞(プログラム委員)を受賞
大岡 凌(インタラクティブコンテンツ(北村・藤田)研究室 D1)、藤田 和之(インタラクティブコンテンツ(北村・藤田)研究室 准教授)、北村 喜文(インタラクティブコンテンツ(北村・藤田)研究室 教授)、中本 葉奈(三菱電機株式会社)、横須賀 佑介(三菱電機株式会社)
- 2025.12.3 日本分子生物学会にてMBSJ Poster Awardを受賞
杉村 直紀(大林研M1)
- 2025.10.31 SSR 2025 Best Student Presentation Award Finalistを受賞
山中 涼丞(M1)、Nathan WALUS(M1)
- 2025.10.31 コンピュータセキュリティシンポジウム(CSS 2025)にて学生論文賞を受賞
河又 彰吾(菅沼研 M1)
- 2025.10.10 大野研究室チームQuixがWorld Robot Summit(ワールドロボットサミット)2025 過酷環境F-REIチャレンジにてプラント災害チャレンジ部門で第2位を受賞
大野研究室チームQuix(重司健太(学振特別研究員)、鈴木翔太(M2)、Rawin Assabumrungrat(M2)、安田運稀(M1)、高橋健一(技術補佐員)、小島匠太郎(TCPAI特任助教)、鈴木裕太(M2)、澤村理生(M2)、福澤快(M2)、小熊一矢(D2)、奈良貞明(D3))
- 2025.10.9 第53回日本カスタービ学会定期講演会の学生優秀講演賞を受賞
北村 嘉大(M2)
- 2025.9.19 第20回YANSシンポジウム(YANS2025)にて奨励賞を受賞
吉田 倅(M2)
- 2025.9.19 第20回YANSシンポジウム(YANS2025)にて奨励賞を受賞
松崎 孝介(M2)
- 2025.9.17 Interverse Virtual Reality Challenge (IVRC) 2025でUnity賞・CRI・ミドルウェア賞・SEED観客賞を受賞
菊池 勇吾(北村・藤田研 M1)、金井 美桜(北村・藤田研 M1)、佐々木 涼(北村・藤田研 M1)、村上 聡(北村・藤田研 M1)、伊藤 勝徳(北村・藤田研 M1)、尾形 優斗(北村・藤田研 M1)、柴藤 りん(北村・藤田研 M1)、佐藤 生流(北村・藤田研 B4)、西山 喜尊(北村・藤田研 B4)
- 2025.9.17 Interverse Virtual Reality Challenge (IVRC) 2025のLEAP STAGEにおいて「市原えつこ賞」、「観客大賞」を受賞
菊池 勇吾(北村・藤田研 M1)、金井 美桜(北村・藤田研 M1)、佐々木 涼(北村・藤田研 M1)、村上 聡(北村・藤田研 M1)、伊藤 勝徳(北村・藤田研 M1)、尾形 優斗(北村・藤田研 M1)、柴藤 りん(北村・藤田研 M1)、佐藤 生流(北村・藤田研 B4)、西山 喜尊(北村・藤田研 B4)



第25回学術懇話会

第25回学術懇話会が令和8年3月6日(金)に開催されました。今回は、3月末をもって本研究科を退職される小林広明教授、宗政昭弘教授、山本悟教授、瀬野裕美教授、早川美徳教授にご講演いただきました。



コンピュータアーキテクチャに魅せられた43年

情報基礎科学専攻 ソフトウェア科学講座 **小林 広明 教授**

小林広明先生は、リアルタイムグラフィックスプロセッサから、低消費電力・高性能プロセッサ、さらにメモリサブシステムへと研究を進展させてこられた歩みを紹介されました。近年の計算機性能を左右する要素としてメモリ階層の重要性に触れつつ、ベクトル型スーパーコンピュータ研究においては、実アプリケーションの要求に根差した設計と、産学連携による社会実装の意義が強調されました。全体としての整合性を保ちながら設計を進めることの難しさと重要性についても語られました。最後に、ポストムーア時代を見据え、エネルギー効率やメモリ中心の設計、量子計算をはじめとする新たな計算原理にも言及され、若手研究者への期待を込めて講演を締めくくられました。(グリーン未来創造機構・グリーンクロスステック研究センター 小松 一彦 教授)



高次元球面における配置の組合せ論

情報基礎科学専攻 情報基礎数理学講座 **宗政 昭弘 教授**

宗政昭弘先生は、1989年にオハイオ州立大学でPh.D.を取得後、大阪教育大学、九州大学を経て2003年に本研究科へ赴任されました。ご専門の数学においては、代数学と離散数学・組合せ論が交錯する「代数的組合せ論」分野の世界的な研究者の一人です。ご講演では、非専門家にも親しみやすい「球の接吻数問題」を取り上げられ、十円玉7枚で示せる2次元から出発して、3次元の場合に関するニュートンの主張、8次元と24次元の特殊性、AIを駆使した最近の進展等について、明快にご解説くださいました。また、新定理を証明することと既存の定理に別証明を与えることの意義の違い等、先生の数学に対する価値観や視点の一端を窺い知る貴重な機会となりました。(情報基礎科学専攻 田中 太初 教授)



数値流体力学と計算数理学

情報基礎科学専攻 情報応用数理学講座 **山本 悟 教授**

山本悟先生は、数値流体力学ならびに数理モデルを数値計算する計算数理学をご専門として複雑な物理・化学現象を伴う熱流動を対象としたマルチフィジックス数値流体力学の創成と発展をこれまで進めてこられました。ご講演ではCompact MUSCL法の構築、極超音速熱・化学非平衡流れ、電磁プラズマ流れ、非平衡凝縮流れ、超臨界流体流れのマルチフィジックス熱流動についてご紹介いただくとともに、スーパーコンピュータを用いた大規模流動解析や高速化、デジタルツイン数値タービンの成果もご紹介いただきました。終始和やかな雰囲気の中でご講演および質疑が進み、山本先生のお人柄もうかがえる大変貴重な機会となりました。(情報基礎科学専攻 古澤 卓 准教授)



数理モデリングの理路が大事

情報基礎科学専攻 情報基礎数理学講座 **瀬野 裕美 教授**

瀬野裕美先生は、生物個体群動態や感染症伝播を対象とする数理生物学を専門とされ、長年にわたり数理モデルを用いた研究に取り組むとともに、多くの学生の指導にも尽力されてきました。講演では、個体群動態モデルの基本的な考え方として複数の数理モデルの例が示され、モデルの前提や構造の違いが結果の解釈に影響することが丁寧に説明されました。さらに、感染症伝播や情報伝播に加え、オンライン行動依存といった現代的な社会問題にも話題が広がり、数理モデリングの重要性が具体的に示されました。オンラインを含め多くの聴講者が参加し、変化の激しい現代社会に向き合ううえでの指針を与える、示唆に富むご講演でした。(システム情報科学専攻 荒木 由布子 教授)



「金平糖」と「物質群として見た動物群」

情報基礎科学専攻 データ基礎情報学講座 **早川 美徳 教授**

早川美徳先生は、物理学者・寺田寅彦先生の先駆的研究に魅了され、相互作用を伴いながら運動する粒子や物体の振る舞いに関心を寄せ、統計的構造や動態の解析、数理モデル化に取り組んでこられました。ご講演では、日本では身近でありながら先行研究のなかった題材として取り組まれた「金平糖の角が形成されるメカニズム」について、分かりやすくご紹介いただきました。さらに、鳥の群れが自然に巨大な編隊を形成する現象を「物理群」の視点から解析した研究についても、丁寧にご紹介いただきました。金平糖製造装置を研究室で実際に稼働させる実験から、ステレオカメラを携えてマガンの群れを追跡するフィールドワークまで、理論と実践を往復しながら探究される早川先生の情熱が随所に感じられるご講演でした。(情報基礎科学専攻 栗林 稔 教授)

専攻トピックス

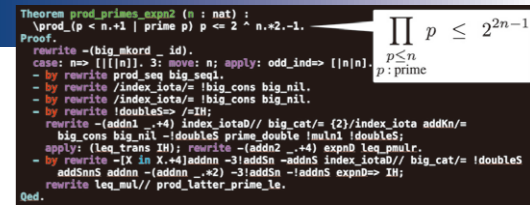
情報基礎科学専攻

Department of Computer and Mathematical Sciences

当専攻の情報論理学分野(中野圭介教授・浅田和之助教・菊池健太郎助教)では、プログラミングやプログラミング言語に関わる理論について研究を進めています。教員が数学科出身であることから研究テーマが理論寄りになることもあります。常に情報科学への応用を念頭に置いて研究を行っています。

中野教授は、木トランスデューサとよばれる木構造データ変換の形式モデルを扱う形式言語理論を、プログラムの解析・検証や最適化に応用する試みを進めてきました。最近では、特に木トランスデューサによる変換の構文的制約が入出力サイズの変化に与える影響を追っています。この研究成果は、プログラムの実行に必要な時間や消費メモリを事前に見積もることに応用できる可能性があり、成果の一部はこの分野のトップレベルの国際会議(International Colloquium on Automata, Languages and Programming, ICALP)に採択されました。これは、プレーメン大学のSebastian Maneth教授らとの共同研究の成果です。

また、当研究室では証明支援系Rocq(旧称Coq)を長年に渡り積極的に利用し、自らの研究の形式化だけでなく、既存の数学や計算機科学についての形式化も進めてきました。証明支援系は数学における定義や定理の証明を形式的に記述することで機械的な検証を可能にするツールですが、最近になってようやく著名な数学者からも注目を集めるようになってきました。当研究室では証明支援系の利便性を高めるべく、その知見の蓄積とツールの拡張も進めています。



▲自然数n以下のすべての素数の積が2の2^n-1乗以下になることの形式的証明(抜粋)

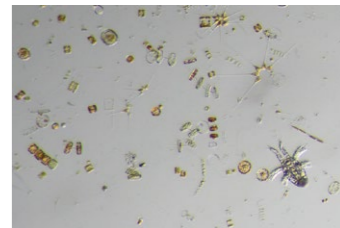
システム情報科学専攻

Department of System Information Sciences

情報生物学分野の大林教授は、2024年に設立された変動海洋エコシステム高等研究所(WPI-AIMEC)の沿岸生態系サービス研究ユニットを率い、宮城県女川湾をはじめとする複数の沿岸海域で研究を進めています。特に東北大学農学研究所附属女川フィールドセンターと連携し、これらの海域で採取される海水(毎週約20リットル)を研究室で処理し、ゲノム解析や画像解析を実施しています。一次試料の処理から解析までを担うことが本研究室の特徴です。

対象とする海域はいずれも外洋と連続しており、黒潮や親潮などの海流の影響の違いを比較することで、局所的な現象と地球規模の変動との関係を読み解きます。植物プランクトン、動物プランクトン、細菌などの低次生態系は海流や水温の変化に敏感に応答し、そのパラメータが沿岸生態系の健全性を左右します。女川フィールドセンターで実施されてきた長期的な環境モニタリングに加え、海水中に存在する多様な生物種のゲノム情報を網羅的に解析することで、物理環境の変化と分子レベルの変動を同時に捉え、生態系全体の応答を統合的に理解します。

ゲノムは各生物種の生存戦略を映し出す遺伝情報です。その解析により、変動を記述・予測するだけでなく、なぜそのような応答が起きるのかという分子機構の解明にも取り組んでいます。分子から生態系までをつなぐデータ基盤を構築することは、将来の沿岸環境の予測と持続可能な海の利用に直結します。現場に根差した情報科学として、海洋生態系の変動を総合的に理解することを目指しています。



▲2025年4月に女川湾の定期観測で採取された海水の顕微鏡画像。多様な植物プランクトンと動物プランクトンが観察され、沿岸生態系の多様性と食物連鎖の一端を示している。

人間社会情報科学専攻

Department of Human-Social Information Sciences

都市を流れる膨大な人流データは、地点間の複雑な関係性の集合であり、その全体像を直感的に把握することは困難です。本専攻の藤原直哉准教授らがJournal of Computational Social Science誌に発表した最新の研究では、組合せHodge理論を用い、複雑な移動データを各地点が持つ潜在的なポテンシャルへと変換する手法を提案しました。

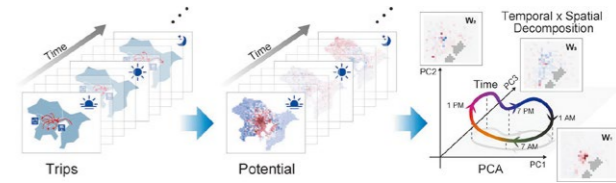
この手法の最大の特徴は、膨大な地点間の人の移動記録(n個の関係性)から、循環流などの要素を削ぎ落とし、各地点における人口流入の傾向を示すn個の数値、すなわちポテンシャルを抽出している点にあります。本研究では、東京都内の約2km四方のメッシュ(237地点)において、2019年と2021年の計2年間にわたる人流を1時間ごとに解析しました。これは、刻々と変化する東京の人流の源泉を、ポテンシャルの高低差による地図として連続的に可視化する試みです。

さらに、得られた時系列のポテンシャルに主成分分析を組み合わせることで、ポテンシャルの地形が時間とともに変化する典型的なパターンの抽出を行いました。解析の結果、以下の知見が得られています。

第一に、ポテンシャルの動的な反転が確認されました。平日の朝には都心部が負のポテンシャルを持つ吸い込み口となり、夕方には一転して正のポテンシャルを持つ送り出し口が変わるとい、都市特有のダイナミックな構造変化が鮮明に浮かび上がりました。

第二に、コロナ禍による構造変化が浮き彫りとなりました。パンデミック下では、このポテンシャルの起伏が全体的に平坦化しており、移動が局所的な範囲に制限される空間の分断が起きていることが数学的に裏付けられました。

本研究が提案するフレームワークは、データの複雑さを削ぎ落として都市の本質的な勢いを可視化するものであり、今後の都市計画や防災、公衆衛生における意思決定に新たな視座を提供します。



▲時空間的な人流の変化を抽出する手法の概念図。(Du et al., Journal of Computational Social Science 9,28(2026)の図1をCC BY 4.0 (https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/) に基づき使用)

応用情報科学専攻

Department of Applied Information Sciences

タフ・サイバーフィジカルAI学講座の岡田准教授は、社会インフラの点検や災害現場での調査を効率化するロボット技術の開発を進めています。

橋梁やトンネルといったインフラの老朽化対策が急務となる中、複雑に入り組んだ構造物内部を安全に調査する技術が求められています。岡田准教授は、ドローンが障害物に接触することを「回避」するのではなく、むしろ「利用」という逆転の発想でこの課題にアプローチしています。岡田准教授が開発した「球殻ドローン」は、3軸ジンバルを介して取り付けた球状のプロペラガードが本体と独立して回転することで、点検対象面に沿って移動する「転がり飛行」を実現しました。接触時の安定性を保つ制御技術や、映像に写り込むガードを処理する技術も構築しました。このドローンは国交省のNETIS(新技術情報提供システム)に登録されるなど、実務への導入が可能な段階に達しています。

あわせて、ロボットが困難な環境下で自身の位置や情報を正確に取得するための「重畳マーカ」の研究も、実用性に優れた独自の技術です。これは、QRコードなどの異なる種類のマーカを1枚に重ねることで、限られた面積でより多くの情報を提示する手法です。照明環境の変化に強い最適配色法を導入することで、夕景や晴天といった自然光の変化に左右されない、高い精度での認識を可能としました。

基本原理の考案から実環境での検証までを通じたこれらの成果は、点検作業の安全性や効率性の向上に寄与し、次世代のインフラ維持管理を支える技術として期待されています。



▲インフラ目視点検用球殻ドローン

2026年3月修了者 情報科学研究科学学位記伝達式

2026年3月25日に2026年3月修了者(博士課程前期2年の課程147名、博士課程後期3年の課程14名)の学位伝達式が執り行われ、学位記は張山昌論研究科長から博士課程前期2年の課程、博士課程後期3年の課程の各修了者代表へ、また専攻長から修了者全員へ手渡されました。

研究科長の祝辞に引き続き、奈良貴明さん(応用情報科学専攻、大野研究室博士後期課程修了)より修了生代表の挨拶をいただきました。修了生の皆さんの今後のご活躍を研究科一同、お祈り申し上げます。



学生の声

応用情報科学専攻 博士課程後期2年

久保田 采佳さん

私たちが日常生活の中で身近なものである医薬品には、体調を改善・治療するという大きな利点がある一方で、期待していなかった副作用が現れる可能性もあります。多くの副作用は治験段階で把握され、医薬品の説明文書である添付文書に記載されますが、市販後の副作用報告によって、患者さんの健康被害を通じて初めて明らかになるものもあります。私は、カルテ等の臨床データを活用することで、医薬品ごとに起こりやすい副作用や、患者さん一人ひとりに生じやすい副作用を予測する研究に取り組んでおり、事後的な対応にとどまらず、先手を打った安全対策につなげることを目標としています。

私は社会人学生として、普段は東京で医薬品の開発支援や審査、市販後医薬品の安全対策に関わる業務に従事しています。現在の研究を始めたきっかけは、安全対策業務の中で副作用報告を確認するうちに、まだ知られていない「未知の副作用」に苦しむ患者さんが少なくないという現実を知ったことでした。研究に充てられる時間は、平日の業務後の夜間と土日等に限られますが、月2回程度、指導教員とのオンライン打合せを設けていただき、進捗報告や今

後の研究方針についてご相談しています。研究室のイベントに参加できる機会は多くありませんが、Slackで研究室の様子を見たり、大学に向う際には研究室に立ち寄りたり、学会で指導教員や研究室の皆さんとお話ししたりすることで、研究室の一員としての自覚を持って日々研究に取り組むことができている。指導教員をはじめ、秘書の方、学生の皆さんには深く感謝しています。研究と業務の両立は容易ではありませんが、双方から刺激を受けながら過ごす日々は、私にとって非常に充実したものです。今後も自身の研究を通じて、社会に貢献できるよう努力してまいります。



実践的情報教育推進室

情報セキュリティや数理・データ科学・AI(AIMD)などの実践的情報技術の習得やリテラシーは専門分野を問わず身につけるべき素養となっています。実践的情報教育推進室はその教育において先導的な役割を果たすべく、社会的な要請が急速に高まってきている実践的分野の教育プログラムを全国の大学や企業との共同活動により実装し、学内外へ展開しています。また、産学連携教育やプロジェクト遂行型学習などの新しい方法に基づく教育を推進しています。当初は文科省事業として連携大学との協働で大学院生向けにセキュリティ分野の実践的スキルを与えるSecCapコース、学部生向けに基礎を与えるBasic SecCapコース、社会人向けにプロ人材スキルを与えるProSecコースを提供してきました。いずれも文科省事業終了後も自主継続として運営しており、毎年全国で学部生200名以上、大学院生100名以上、社会人50名以上の修了生を輩出しています。さらに、一般市民向けに学都「仙台・宮城」サイエンス・デイに出展し、情報セキュリティの啓蒙活動を行っています。

令和3年には産学共創の連携拠点「ブリヂストン×東北大学共創ラボ」を設置し、ブリヂストンのDXを支えるデジタル人材の育成に取り組んでいます。現場の社員を対象とした実践的PBL(課題解決型学習)や大学・企業間の共同研究を通じた高度専門人材の育成を推進し、現場に変化を生み出すサポートをしています。

また、社会人向けのリカレント教育として、令和5年度より「DXインフルエンサ養成講座」を実施し、「サイバーセキュリティ」「クラウド」「数理・データ科学・AI

(AIMD)」の専門知識と実践力を備えた人材の育成を推進しています。さらに、マシンインテリジェンス研究会やCDLE宮城等のコミュニティにおける活動、仙台市職員向けの生成AI研修の講師、仙台市X-TECH イノベーションプロジェクトでの地元企業連携などを通じ、実践的技術の地域への普及や新しい産学官連携の形にも挑戦しています。



▲サイエンス・デイでの展示の様子

東北大学があなたのDXスキルアップをお手伝い!!

DXインフルエンサ
養成講座

受講料無料

東北大学オープンバッジ取得可能

東北大学 大学院情報科学研究科
実践的情報教育推進室

詳しくは
こちら▶

DXインフルエンサ

▲DXインフルエンサ養成講座



東北大学 情報科学研究科 ニュースレター
NEWS LETTER vol. 28

氏名・役職・所属等は執筆時点の情報を掲載しています。

【編集・発行】

東北大学 大学院情報科学研究科 広報室 E-mail : koho_is@grp.tohoku.ac.jp
〒980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6番3号09
TEL: 022-795-4529 FAX: 022-795-5815 https://www.is.tohoku.ac.jp/



このパンフレットは「三森印刷」
により印刷しております。



環境にやさしい植物性インク
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。